絵本の読み聞かせと親子のコミュニケーション

川井蔦栄　高橋美知子　古橋エツ子

近年の日本ではTVゲームなどの発達により子どもの本離れが社会的問題になっている。とりわけ幼児期における親子のコミュニケーションの欠落にもつながる最も重要な要因の一つと考えられるため親が子どもに絵本を読み聞かせることの効用（効果）に注目した。本研究では子どもが通う幼稚園で「絵本の読み聞かせボランティア活動」を実施している保護者（親たち）へのインタビューをし、その結果と過去の保育所の結果を比較して、相互作用解析を行った。その結果、本の読み聞かせを行った親子ではそうでない親子と比べ親子間の話題、コミュニケーション（身体的接触を含む）の増加が顕著に見られた。本の読み聞かせは読書離れだけでなく幼児期の親子のコミュニケーションの改善にも有益と期待できる。

キーワード：絵本、読み聞かせ、親子関係、ふれあい、コミュニケーション

Today, Japanese children are getting less fond of books due to advancement of various entertainment devices such as TV games, and this causes a social problem. Although reading book is one of the most important communication tools between parents and children, the effect of using picture book for child education is still underestimated. In this study, we interviewed parents who were engaged in the "Reading Picture Book" activity in their children's kindergarten. The results of the interviews were compared with previous data in day-care center to analyze the interaction. As the result, it was found that the parent and child who were engaged in the said activity, compared with those who were not, apparently had ampler topics of conversation and more communication (including physical contacts). Hence, the positive effect of reading picture book to children especially in their early childhood is robustly confirmed. Reading book to children is expected to not only prevent children's alienation from reading books, but also improve the communication between parents and children.

Key words : Picture book, reading book, relationship between parent and child, contact, communication

要旨：本論文は、筆者の過去の調査をさらに深めるために、幼稚園の読み聞かせボランティア活動のヒアリングを行った。

その結果、読み聞かせにおける親子のコミュニケーションは、子どもの気持ちを理解しやすくなるなど、①親子の絆を深め、②本への親近感を増し、③知的な好奇心をもたらす、ことが明らかになった。

はじめに

（社）日本小児科医会は、2004（平成16）年2月に「子どもとメディア対策委員会」[1]において、また同年3月には、日本小児科学会の「子どもの生活環境改善委員会」において、相次いで子どもとテレビについての提言を発表した。新聞紙上でも、「ゲーム脳」[2]と言う言葉が取り上げられて、

子どもとテレビゲームとの関係が子どもの内面に与える異変について警告している。周囲を見ても、絵本よりテレビを見ている子どもの姿が多い。

このように、今日の子どもを取り巻く環境の変化は、家庭教育や子育てにどのように作用し影響を与えているのだろうか。本来、人間形成の基礎をなす乳幼児時期こそテレビによるお守りではなく親子でふれあうことが大切ではないだろうか。とりわけ親の読み聞かせによって、膝のぬくもりとともに人間としての大切なものを伝えることができるのではないだろうか。すなわち、親を含めた家族による読み聞かせは、情緒が安定するばかりでなく日々の子どもの変化にも気づかせてくれる側面があるからである。

最近は共働きも珍しくないが、絵本の読み聞かせは他の遊びと違って、帰宅してから就寝までの少しの時間や、電車の中などどこででも読み聞かすことができる。また、読み聞かせは母親に限らず、父親、祖父母、きょうだいなど、それぞれ独自の読み方に情緒感があり、子どもにとっては親を含めた家族と、一緒に楽しい経験を数多くできる機会でもある。何よりも読み手と子どもが自然に接近する場面が増え、子どもにとっては、親たちを独占できる機会でもある。さらに、絵本の読み聞かせを通して、親子のふれあいを構築することで、①親子の信頼関係の形成、②子どもの情緒面での安定、③言語やリテラシー（読み書きなどの能力）、④物語の内容を理解しようとする認知的な側面、などの効果が培われるものと考える。

ところで2001（平成13）年12月12日に、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布、施行された（資料１参照）。この法律に基づき、各市町村は「子ども読書活動推進計画」[3]の策定が求められるようになった。現在では、行政による推進の方向性と連動して各地域で読み聞かせが行われている。その場所や方法は、読み聞かせグループの数ほどあるといわれている。地域のみでなく、幼稚園や学校へ出向いては、読み聞かせを行ったり、音楽と本の朗読のコラボレーションを行ったりなどもある。とりわけ、「絵本の読み聞かせ」を幼稚園でボランティア活動の一環として行っている保護者へのヒアリング調査では、園児たちとの交流やこの活動をとおしての親子のコミュニケーションの様子が伝わってきた。

そこで本稿では、まず絵本の読み聞かせの効用を述べ、次いで父親および母親による読み聞かせの相互作用を検討したい。加えて、幼稚園で「絵本の読み聞かせボランティア活動」を実施している保護者へのインタビューをとおして、親子のコミュニケーションについて考察したい。

Ⅰ　父親と母親の読み聞かせによる効用

1　父親の読み聞かせ効果

ここでは、父親の読み聞かせによる親子の相互作用や効果について取り出してみたい。先行研究論文には、母親の読み聞かせに関する論文は多い。しかし、父親に育児休暇をとってまで子どもとのコミュニケーションをとるようにいっているなかで、父親による読み聞かせの先行研究論文がほとんどないことを痛切に感じた。

父親による読み聞かせは、家庭や地域において広がりつつあるが、読み聞かせを経験をした父親は、絵本には文にリズムがあり、物の名前を覚えさせようという意図もあり、少しブラックなものやいろいろな仕掛けがあることにまず驚いたと、仕事のみの生活とは異なる新たな発見に感動をしている[4]。

なかでも読み聞かせ会を結成した父親３人は、父親が絵本を読むということが、なにも特別なことではなくて、家庭内での「コミュニケーション」、「遊び」の一環であるという彼らの主張への共感が得られつつあるように感じている[5]。

父親の読み聞かせ効果としては、まず絵本の選び方に特徴がある。安藤は、「ママたちはほんわかしてかわいい絵本を選んでいるが、お父さんが選ぶ本は、残酷な設定、ビロウ[6]なテーマ、ワイルドさといった母親からは敬遠されている絵本を、母親と違った切り口で選んでいる。ビロウななかにも深い意味がある。昔話の底辺には、家父長制や嫁姑の因習に対するアンチテーゼが横たわっているとしても父親は豪快に読んでしまう。うんちや、鼻くそ、おならなどの話は、子どもにとってはとても関心が高い。子どもたちは生存につ

ながる大事な機能であることを本能的に察している」と言っている。また、昔話には残酷な要素があるが、安藤は、「桃や竹から子どもが生まれたり、トロル[7]をばらばらに引きちぎったりと、一度聞いたら忘れられないインパクトがある。こういう残酷な話は、子どもの情操教育によくないという大人もいるが、子どもは絵本の中の話であることをわかったうえで楽しんでいる」といっている[8]。

金柿は、「怖い話を、低音を効かせて読むと、お母さんの優しい声の周波数とは別の伝わり方をするだろう。お父さんの膝や、肌を通して伝わる声というのは、耳だけで聞くのと違って特別な温度差がある。お父さんの匂いとか、チクチクするヒゲ、そういったリアルな実体感も伝わる読み聞かせは、ふれあいの一部だから」といっている[9]。

松居は、「怖い話も父親がしているから、子どもは安心して怖がっている。そこに物語の大きな意味がある。昔話にはそういうことがいっぱい語られていて、そうした物語体験を子どもの時に豊かにしている方がよい。物語を語るには、語り手は物語の世界を自分の中にイメージして語らなければ伝わらない。だからこそ父親が語ってくれたものとして、子どもの心に定着するのである。今の子どもはそういう体験がとても少ない。みんな見える世界ばかりを追いかけている」と述べている[10]。

柳田は、「悪なり、恐怖なりというものを、親と子の信頼関係ががっちり成立している読み聴かせのなかで体験させる、あるいは、恐怖の模擬体験をさせる、その枠組みが大事なのだろうと思うんです。親との温かい信頼関係の中で、怖がってもしがみつけば大丈夫みたいな、そういうなかで恐怖体験をすることがとても大事だ」と語っている[11]。

脇は、①幼い子どもにとってあらゆる物語が大冒険であって、信頼できる大人が付き添ってくれないと、子どもは安心して心を開けて楽しむことができないこと、②大人はいろいろな物語に親しんでいるから、たとえハラハラする展開になっても、必要以上に不安におののくことはないということ、③ある程度の怖さや悲しさに耐える訓練ができることで、ちょっと怖いことにも挑戦する勇気がわいてくることになり、世界を大きく広げることが、この時期の子どもに必要とされていること、④それには、父親の読み聞かせが、冒険の付添い人としての身近な大人の役割であること、などを主張している[12]。

さらに土堤内昭雄は、自分の家には随分たくさんの絵本があるが、子どもが小さい頃、毎晩、夜寝る前にそれぞれが好きな絵本を一冊ずつ持ってくるので、布団に三人が川の字に並んで読み聞かせていた。野菜の苦手だった子どもたちに何とか好きになってほしいと思い「ぼくのにんじん」をよく読んだ。何度も何度も読んだおかげで、今では二人の子どもともにんじんが好きだ、といっている[13]。

松居は、「ある父親が幼児期の息子に、時間の許す限り毎晩その子の寝る前に、絵本を読んでやったそうです。しかも、その時に息子の手を握って読み聞かせていた話を聞き、男の子の気持ちを推量すると、本当に嬉しかっただろうと思う、手を握って毎晩絵本を読んでくれた父親のこと、その大きな手のぬくもりを一生忘れないだろう。絵本はこうした人間関係のなかで最も生きてくる。絵本は人間と人間とをつなぐものとして最も存在価値がある」と述べている[14]。

椎名は、親としてできることは何かといったら、その時は新米の親だったから、絵本を読んで聞かせることぐらいしか考えが浮かばなかった。膝の上に乗せてずいぶんたくさん読んで聞かせていた。トロルが「誰だー」と大声で怒鳴るたびに、娘は膝でドキッとしていた。大人になった娘は、「あの時、お父さんと一緒に絵本で旅をしていた」と言っている。父と子どもが絵本で一緒に旅をするなんて、人生の宝物になると語っている[15]の。父親の絵本の読み聞かせのなかで冒険の旅をするということは、その時の心の共有のみではなく、大人のなっても、父親の子育て観や、子どもに伝えたいものが絵本を通して伝わり、乳幼児期の信頼関係を構築し、父親との強い絆をつくるものと考える。

その後、椎名は、娘が大学を出て、今はニュー

ヨークに住んでいてプロの舞台役者をやっており、もうずいぶん会っていないがときどき電話で話をするときに、やっぱり感情の共有とでもいうか、彼女の気持ちをいまではなんとなくつかめる、と述べている。なにを楽しんでいるか、なにを驚いているか、なににちょっと苦しんでいるか、わりと電話の声だけでわかる。もしかするとそれは、子どもの頃からなんとなく、共有していた絵本でつながる回線とでもいうようなもののせいかもしれない。そういうものがまだ生きているんじゃあないかと思い、絵本というものは、もしかすると、ものすごい力をもっているんじゃあないかと思う、とも言っている[16]。

柳田が57歳のときに、25歳だった次男が長い心の病の末に、自ら命を絶った。柳田は何も出来ない日々が続いていたが、少し心が落ち着いた頃ふと書店に立ち寄った時、いつもは小説とか新刊本しか見ないのにその時は絵本コーナーの前に立っていた。なぜなのか自分にもわからないが、無意識のうちに息子が幼かったころに読んでやった絵本が懐かしくなって、今でもかつての絵本が店頭に並んでいるかどうか再会したくなったと語っている。絵本をみつけた柳田は、子どもと読み聞かせをして過ごした時の情景がよみがえって、元気になっていったのであろう[17]。

このように読み聞かせの効果は子どもだけでなく父親にも大きな影響を与えており、柳田自身も効果を感じとった一人である。

2　母親の読み聞かせ効果

続いて、母親の読み聞かせの相互作用からくる効果についても述べる。

わが国では戦後の高度経済成長期を経て「母子密着、父親不在」という親子関係が続いている。家庭での読み聞かせにおいても最も多いのは母親である。読み聞かせに関する発達心理学研究は、1970（昭和45）年代から行われているが、被験者は主に乳幼児と母親である。発達心理学では「親＝母親」として扱われ、父親の親としての認識は遅れて認められる存在とみなされていた[18]。だが、「親＝母親」という構図は、それ以前の1950（昭和25）年にJ・ボゥルビィが行った「子どもの福祉」についての調査「三歳児神話」によっても強調され、母子喪失に対する危機感とともに欧米諸国に広まった経緯がある[19]。

読み聞かせ調査において横山は、3歳代から4歳代の子ども4人を対象とした調査結果から、各家庭において絵本の選び方や読み方に違いがみられる、ことを明らかにしている[20]。

ところで、母親の読み聞かせについては以下のような諸説がある。

秋田は、安定した家庭では絵本の内容を楽しむ家庭が多いという。安定した家庭では、子どもの声を受け入れ応じながら、そこに「説明を加える」、「生活の経験を話す」など身振り手振りなどで、読み手であると同時によい聞き手役を、母親が安定した関係の中で担っている。これに対して、不安定な家庭では、注意したり、集中させるための統制の言葉が多くなると言う[21]。

石崎は、「同一の母親でも第一子と第二子によって使用する方略は異なることが明らかになった。これには母親側の要因、きょうだいの同席、子ども側の要因が相互に関連していると思われる。母親側の要因として挙げられるのは、母親の子育て観である。母親は第一子に対して、教育の強い義務感を持っていると思われる。母親は対話の主導権を握り、命名をしながら質問を繰り返し、子どもから反応を引き出そうとしていた。また、母親はW児の注意喚起に反応しないことが多く、自分のフォーマットに子どもを組み込もうとする態度が強いようである。一方、第二子に対しては、子育ての経験と第一子の世話という負担があり、その分第二子への関わり方は第一子と異なり、距離をとったものになったと思われる」[22]と述べている。したがって、母親の読み聞かせでは、子育ての責任から意義や期待が反映されることが示唆されている。

さらに石崎は、読み聞かせ過程における母子の会話パターンにおいて、最初は母親主導型であるが、子どもが2歳児頃からは母親主導のみではなく、母子交代型が成立するとしている。親は子どもが能動的に参加する足場をつくり、次第に子どもが中心になって活動していくという導き方がみられる、といっている[23]。

（1）母親による読み聞かせにおける変化

保育園と幼稚園の読み聞かせ調査で、読み聞かせによるなんらかの変化や効果の有無について尋ねると、保育園、幼稚園ともに子どもの変化や効果を実感している人は多かったが、幼稚園の親からは、「読み聞かせは親である自分自身も楽しい（三歳児）」、「子どもへの効果は分からないが、親はその時間だけは無心で子どもと向き合えている（三歳児、3ヵ月児）」、「親もイライラが飛び、優しい気持ちになれる（四歳児）」、「気分が落ち着く（五歳児）」という答えがあった。

さらに、幼稚園で読み聞かせをしている親からは、「父親の帰りが遅いから、読み聞かせは主に母親がしている」と答えている。また、「子どもの成長とともに、子どもの帰宅時間がズレることで読み聞かせの時間が減少している」ともいっている。母親は子どもにゆっくり読み聞かせをしたいと思っているが、時間的にゆとりの無い状況が窺われる。

母親は、育児以外にも食事やその後片付けなど、家事全般をすることを無意識のうちに認識させられて、母親の役割となっているのではないかと考える[24]。

余裕の無い状況でも読み聞かせを行っている母親は、読み聞かせをしているうちに、子どもと向き合っている自分に気づき、母親自身も安らぎを得ていることが推測される。

（2）母親の読み聞かせにおけるコミュニケーション

秋田は、「眠る前にふとんに入り、母親が絵本を読んでくれたことをおぼえています。眠気と母のやさしい声が大変心地よく、知らない間に眠りに入った記憶があります」と述べている[25]。親子でふとんに入り、読み聞かせのやさしい声とともに安心して眠りに入る子ども、母親がその寝顔をながめて安堵する姿は、子育てをした誰もが経験することではないだろうか。

江玉は、「母子間における相互作用の特徴として、全時期を通して受容的応答[26]、注視[27]、表情[28]の比率が高いことから、母親は日常的に読み聞かせをする過程において、受容的なかかわり方をしていること、子どもの表情を見ながら読んだり話しかけるときには、子どもに視線を向けるようにして読み聞かせを行っていること、快や笑いという感情面を表現することが多い」と述べている[29]。確かに「いないいないばあ」[30]は40年近く読み継がれてきたが、「いないいないばあ」という行為は赤ちゃんの誕生と同時に母親のごく自然な行為として行われているものと考える。生まれたばかりの赤ちゃんの顔を覗き込みながら「バア」と語りかける、可愛い笑顔に母親は授乳のたびに、また、仕事の手を止めて「バア」と語りかけるのである。

このような母親の表情や、ジェスチャアー、言葉の抑揚、リズムを通して向き合うと、二つの心は通じ合い、その繰り返しのなかでお互いの理解と信頼関係が構築されるのである[31]。

佐々木は、「同じ経験内容を分かち合えることが可能になるため、コミュニケーション回路を開発する基本的なレッスン」だと述べている[32]。

3　母親による読み聞かせの相互作用

小西は、親子でコミュニケーションをとるためには「語りかけ」はいいが、語りかけには「語り返し」があることが前提となり、読み聞かせも絵本を通して親子の気持ちのやりとりをすることに意義があるという。母親が本を読む、いろいろな顔をする、声が違う、今日は疲れている、親と同じ気持ちになれた、などと子どもが内容の不思議さと同時に人間関係の面白さを学ぶのが読み聞かせの語りかけである、と述べている[33]。

横山は、日常の読み聞かせ場面は、絵本の内容を伝える場としてのみでなく、絵本を挟んで母子が向き合い、子どもの興味に応じて、また、登場人物に自分を重ね合わせたり、時に子どもの日常や過去を振る返りながら、さまざまな対話が交わされるコミュニケーションの場として機能している、さらには、対話は交わされなくとも絵本を囲み共に時間を過ごすといった経験自体が「情緒的なコミュニケーション」に当てはまるとも考えられると言っている[34]。

秋田は、聞き手である子どもの興味や関心、生

活体験などに個人差がみられるという。「三歳から四歳代は、子どもが選んだ絵本を、子どもの興味・関心・経験を基盤に、家庭独自の読み方をする時期である」、「百家庭百様の絵本の世界が創られ、その家庭独特の新たなお話の文化が生み出される」と述べている。その人のもっている持ち味を子どもが受け止めることが、それぞれの家庭での読み聞かせであり、子どもが絵本と出会う乳幼児期最初の頃のあり方ではないかと考える[35]。

Ⅱ　「絵本の読み聞かせ」に関するヒアリング調査

1　ヒアリング調査の対象者とその活動内容

（1）対象者

今回は、過去に行ったアンケート調査[36]をさらに深めるため、幼稚園の保護者に直接、個別に聞き取るヒアリング調査を実施した。対象は、京都市内の幼稚園で読み聞かせのボランティア活動を行っている13名の保護者たちのうち、９名にお願いをした。

（2）対象者の活動状況

ヒアリングの対象者である保護者たちは、月に２回ずつ園児たちに「読み聞かせ」を行うというボランティア活動をしている。この活動を始めてから２年が過ぎようとしており、読み聞かせの準備は、各親の得意な作業をすることで協力体制をとっている。ボランティア活動では、「長」を決めていない。それは、長に責任を負担させるのではなく、各親一人ひとりが責任をもって活動することを基本とするからで、こうした保護者たちの柔軟なあり方が伸び伸びとした活動につながっていることを感じた。また、小さい幼児連れの保護者もいて、ペープサート[37]のときに幼児が出場したり、参加したりしている。ときどき、保護者OBからのバックアップなどもある。

読み聞かせをするときは、直前に音楽「愛の挨拶」を放送でながすため、園児たちは読み聞かせの時間がきたことを知る。年少から年長の園児たちが講堂に集まると、それからは保護者たちがすべての進行を担当する。園長も、幼稚園教諭たちも、保護者たちにすべてを任せており、特別な進言はない。

具体的には、保護者たちが「こんにちは」と言い、それに園児たちが「こんにちは」と答えて始まる。保護者たちは、図書館から借りてきた「大型版の絵本」を読み、時には、他の保護者が手作りの品を取り入れながらペープサートも行っている。絵本を読んでいる間は、園児たちは集中し、歓声をあげたり、掛声をかけたりする。そのなかで、質問を投げかけられると元気よく「ハ～イ」と答えたり、一所懸命答えようとしたりする。まだ興奮がさめやらぬなか、「ありがとう」の声で終了する。園児たちだけではなく、読み聞かせを行っている保護者たちも、毎回「楽しかった」と言っている。

2　ヒアリング調査の方法

調査方法は、実際に行われている読み聞かせの活動を見学後に、保護者の方々から下記の６項目に関する質問をして答えていただいた。

3　ヒアリング調査の質問項目

６つの質問項目は、下記のとおりである。

Ｑ１　お子さんは何歳ですか。

Ｑ２　お子さんが何歳の頃から、読み聞かせをしていますか。

Ｑ３　幼稚園での「読み聞かせ活動」を始めたきっかけは何ですか。

Ｑ４　ご自分のお子さんへの読み聞かせ頻度は、どれくらいですか。

Ｑ５　読み聞かせをしていて、気付かれたことやエピソードなどを教えてください。

Ｑ６　読み聞かせの活動で、幼稚園によく来ることで幼稚園との関係は如何ですか。

4　ヒアリング調査の結果

（1）子どもの年齢・読み聞かせた年齢・読み聞かせの頻度

質問項目のＱ１、Ｑ２およびＱ４に関する回答は、下記の表にまとめた。

QNo.	質問項目	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん
Q１	お子さんの年齢は？	４歳	０、５、８歳	２歳、４歳	４歳（双子）	２歳、５歳
Q２	読み聞かせは何歳から？	０歳	してない	０歳	８か月	10か月
Q４	読み聞かせの頻度は？	毎日１～３冊	週２～３冊	毎日	毎日	週１回
QNo.	質問事項	Fさん	Gさん	Hさん	Iさん	
Q１	お子さんの年齢は？	５歳、９歳	３歳、５歳	５歳	１歳、４歳	
Q２	読み聞かせは何歳から？	０歳	１歳	２歳	胎児から	
Q４	読み聞かせの頻度は？	週５回	週３回	時々	毎日	

（２）Q３　幼稚園での読み聞かせのきっかけ

幼稚園での読み聞かせのきっかけについては、

Aさん：もともと児童館で読み聞かせをしていたので、また、読み聞かせをしたいなぁと思って始めた。

Bさん：子どもが小学校へ入って作文を書くようになると、読み聞かせをしている子としていない子では違いがあることが分かった。子ども自身が読むには、限界があり、読み聞かせは国語力だけでなく、言葉のつながりやストーリーが頭に入ることから、幼稚園での読み聞かせが良いと感じて始めた。

CさんとGさん：読み聞かせのボランティアの会に参加して始めた。

Fさん：幼稚園での読み聞かせのボランティア活動に入ってから始めた。

Hさん：子どもが読み聞かせに興味を示さないから、幼稚園の読み聞かせボランティアを始めた。

Iさん：子どもから「なんでママは幼稚園に来て読み聞かせをしないの？」と何度も言われたから。

（３）Q５　読み聞かせをして、気がつかれたことはありますか？

（子ども、親子の変化、思い出に残っていること、などエピソードを教えて下さい）

Aさん

・絵本「おやすみ　ここちゃん」ベネッセの中の本が好きで毎日その本を読み終えると一緒に眠ってしまう。

・動物、かわいい絵の本が好きで、文字を読めなくても絵本の内容を覚えている。

・文字に興味を持ち、お手紙ごっこをすることで、テレビを見る時間が減少した。

Bさん

・これまで母親自身は小さい頃から本を読んで育った。本を好きだが、子どもに読み聞かせるという音読みが苦手である。読み聞かせは子どもの育ちに重要だと分かっていながらしなかった。母親が第２出産でつわり（悪阻）で体調不良時に、祖母が「赤ちゃん好きだもん」を読み聞かせた。すると「赤ちゃんが生まれるとお菓子を分けてあげなくてはいけない」と言った。母親は、読み聞かせた絵本によっては、時期により逆効果もあるが、その後「遊んであげる」と言い始めた。

・虫のでてくる本を「いつ読むの」と尋ねてくる。

・女の子は「くまのがっこうシリーズ」が好き。

・母はもともと絵本が好きで、これまであまり読んでいなかったが、幼稚園での読み聞かせグループに入ったことで、２、３回程度読む練習をすると、子どもは喜んで聞いている。

・幼稚園に入る前に、「チック」が始まったが、担任にそのことを話すことで、園全体が受容し、対応してもらったことで「チック」が入園して治った。

Cさん

・長男は好きな本の１ページを覚えて、字が読めなくても、自分で読んでみたり、弟に読んで聞かせたりします。

・夜寝る時に読む習慣がついていて、自分から「今日はこれ」と本を持ってきます。

・今、年中の長男が、教えていない字でも、

自分で読めたり、最近は特に字や言葉に興味を持てたりできるようになりました。

Dさん

・双子なのですが、ある日一人に本を読みました。次はもう一人の番。「好きな本を持ってきて」と言うと、同じ本を持ってきました。「さっき読んだでしょう！」と 言うと「さっきは一人目の子（名前）に読んだでしょう！今度は私のために読んでと！」と同じ本を2回読まされることが多くあります。

・私の膝の上で読んでもらうのが、ステイタスの様です。

・一人づつ（同じ本）ぼくのために！読んで・・

Eさん

・いろいろな本よりだいたい決まった本を持ってくる。

・何回も読んだわけでもないのに、セリフなどを覚えている。

・やっぱり記憶力がいいのだなと思うことがよくあった。

・自分で何かをする本（ぬりえ、字をかく）を自分なりに考えてすることが多くなった。（5歳の娘）

・自分で車の名前などを叫んで見ている。

Fさん

・息子が字を覚えた。

・語が多いと言われた。

・作文がみんなのお手本で読んでもらっているらしい。

・ものすごく本が好き。

・娘が字を覚えた。

・自分ですらすら（？）音読している（拾い読みではなく）。

Gさん

・動物の本を読むと字が読めない子は絵を見て「何の動物だろう？」「何をしているのだろう？」といろいろ想像して、想像力が膨らむような気がします。

・文字を読みたいなど、興味も出てきている。

・幼稚園によく来ることで、自分の子どもも喜んでいます。

・お友達の子どもも知っているお母さんだと嬉しいのかよく声をかけてくれます。

Hさん

・あまり興味を示さなかったのですが、幼稚園ごっことして絵本を読むと、興味を示してくれるようになりました。

・家での読み聞かせの後、「ありがとう」と言う。これは幼稚園での経験から、場面が変わっても言えるようになる。

・「読みに来て」と言う。来ると喜ぶ。感情や経験を言葉で伝えにくい分、絵本を読む事で子どもの気持ちを引き出しやすくなり、「あのことかぁー」と理解する。

・ 幼稚園に母親が来ることをとても喜んでいて、また来て欲しいと家で話しています。

Iさん

・絵本全てを覚えても、尚、読んで欲しがる。

・遊びの中ででも、絵本内のセリフなどが使われることに気が付いた。また、子どもが、こんな言葉を知っているのか知らないのか！と気づく。

・観劇も大好きで、見ている間は怖がっていても、あとでパンフレットを見て何度も話をするので、“好きなんだなー”と思います。

・絵本好きな子どもほど、怖い場面で怖がると思うのは私だけかしら。想像力が豊かなのではないでしょうか？

・子どもが喜ぶのが楽しい。

・練習は2、3回だが、選んだりすることで、子どもの反応が楽しい。

・他の子と比べるとはまり込む。

（4）Q6　読み聞かせなどで、幼稚園によく来ることで、幼稚園との関係は如何ですか？

Aさん

・良好

・「園だより」は、月1回の配布だが、「クラスだより」は週に数回配布することもあ

る。ボランティア活動を通して子どもをみる機会が多いことから不安がない。さらに、「おいたちの記」を活用して、読み聞かせの感想のみならず、保護者の不安や疑問を書くことにより、即対応してもらえるので、問題がすぐ解決している。

Bさん

・親同士で刺激になる。

・参観日以外にもよく来ている。7月は行事があり1週間に4、5日来ている。里山体験なども良い。

・ボランティアは楽しいし、また、常に子どもの様子もみられることから安心できる。

Cさん

・ボランティアなどでよく幼稚園に来ると、子ども自身あまり自分（母親）の方には来ませんが来てくれていることが嬉しいようです。

・幼稚園に対して以前より親近感を持つようになりました。

Dさん

・自分の子どもの様子が分かり、先生とも少しお話が出来有難く思っております。

Eさん

・子どもは照れくさいようですが、いろんな園児に声をかけられて嬉しいです。

・とにかく楽しい！！

Fさん

・「園のながれ」が分かる。

・園長先生とお話しさせて頂く機会が出来た。

Gさん

・来ていない頃に比べると、先生方ともスムーズな関係が取れているように思います。

Hさん

・保育中の子どもの様子が分かり、先生とお話する機会が増えました。

・お楽しみ会などで、子どもの反応が分かり、家庭での話題も増えてきました。

・気になっていることが聞きやすくなった。

・幼稚園に親がよく来るようになってから、先生ともよく話ができる。連絡ノートもあるが、子どもが障害を持っており、聞きたい事や疑問も直接尋ねられるので、問題が早く解決する。

・子どもが障害を持っているので、迷惑をかけていると思うが、読み聞かせ会に入れてとても楽しい！！

Iさん

・他の子どもや、担任以外とも話が出来るので、自分の子どもの事が良くわかるようになりました。

5　考察

今回のヒアリング調査では、読み聞かせにおける「子どもの変化やエピソード」について幼稚園でボランティア活動を行っている9名の保護者から、具体的に話を聞くことができた。以下、主な点を考察する。

（1）読み聞かせの時期など

まず、読み聞かせを始めた時期は、乳児期が最も多く9名中7名が1歳未満に始めている。先行研究では1歳児からが一番多かったが[38]、それと比べると読み始める時期は早期になりつつあるといえる。

また、読み聞かせをしていない親の一人は、その理由として、「母親自身はもともと絵本が好きで、小さい頃から絵本を読んで育った。しかし、子どもに読み聞かせるという音読が苦手である。読み聞かせは子どもの成長に重要だと分かっていながらしていなかった。だが、幼稚園で読み聞かせボランティア・グループに入ったことで、家でも2～3回程度読む練習をするようになり、子どもは喜んでいる」と答えていた。

したがって、母親自身が絵本好きであっても、必ずしも子どもに読み聞かせをすることにはつながっていなかった。それが、幼稚園での読み聞かせボランティア活動への参加によって、親子とも読み聞かせを始めたきっかけづくりができて、親子のコミュニケーションも豊かになったといえよう。この点では、「親子のコミュニケーション」を前面に掲げて行っているわけではないが、幼稚園における保護者間の交流やボランティア活動に

よる親子間の良好な関係への効果は大きいと感じた。

（2）読み聞かせによる子ども・親の変化、エピソードなど

絵本の読み聞かせから、子どもの変化、親の変化、読み聞かせの思い出、エピソードなどについて話してもらった内容を考察したい。

子どもの変化については、「文字が読めなくても、絵本の内容を覚えて読んだり、弟に読み聞かせたりしている」、「動物の本を読むと、絵をみていろいろ想像している」、「何回も読んだわけでもないのに、セリフを覚えている」など、子どもの認知的発達について肯定的にとらえた言葉が聞かれた。また、親にとっての変化については、「こんな言葉を知っているのか、知らないのかに気づいた」、「絵本の好きな子どもほど、怖い場面で怖がるなど、想像力が豊かなのではないか」など、親は子どもが感受性豊かに育っていく姿や変化を敏感にとらえている。子どもたちは、一番安心のできる親という読み手から、愛情とともに、絵本の楽しさを受け取っているのであろう。

親にとっての読み聞かせの思い出については、4歳の女の子が、「毎日『おやすみここちゃん』の絵本を読み終えると、一緒に眠ってしまう」という思い出があった。子どもは、親が心を込めて読む声と肌のぬくもりのあたたかみに導かれて、心地よい眠りに入っていくのであろう。親は、子どもの成長発達に期待するばかりでなく、読み聞かせを通して、子どもの姿にふれ、親子ともほほえましい気持ちになっている。また、絵本を読んでいなかった親が、読み聞かせグループに入ったことで練習を重ねて絵本を読み始めている。「練習は2～3回位しかしなかったが、本を選んだりすることで子どもの反応が楽しくなった」といっている。さらに、「絵本を読むことで、子どもの気持ちを引き出しやすくなる」など、子育てにやりにくさを感じる親は多い今日、読み聞かせを通して、親子のコミュニケーションが増え、子どもの気持ちが理解しやすくなっていることが伺える。

一方、読み聞かせをすることで、日常生活でも共有できる場面が増していることも分かった。例えば、「感情や経験を言葉で伝え難いぶん、絵本を読むことで、子どもの気持ちを引き出しやすくなり、あのことだったのかぁと理解する」、「遊びの中でも、絵本にあったセリフなども使われることに気づいた」と述べている。さらに、「文字に興味を示し、お手紙ごっこをすることで、テレビをみる時間が減少した」など、読み聞かせの効果は生活リズムの改善にもつながっている。

子どもたちは、絵本の楽しさを実感すると、「いつ読むの」と忙しくしている親に尋ねている。「双子のきょうだいは、一人に本を読むと次はもう一人の番で『好きな本を持ってきて』というと、同じ本を持ってくる。『さっき読んだでしょう』というと、『さっきは、あの子に読んだでしょう。今度は私に読んで』と同じ本を2回読まされることが多くある」と述べている。読み聞かせは、子どもにとって「自分のために読んでくれる」という満足感とともに、親を独り占めできる時間なのであろう。

（3）幼稚園における保護者の活動による効果

読み聞かせによる親子の育ちを支援する幼稚園によって、読み聞かせのボランティア活動は積極的な活動を広げている。2006年に発足した活動は、当初は保護者の人数は6人であったが、2007年には13人に増えている。読み聞かせで活動している保護者が、全体の保護者に呼びかけて広がっている。親は読み聞かせボランティア活動をとおして、幼稚園との関係についてどのように感じているのであろうか。

この点について、保護者たちは、「子供のことがよく分かるようになる」、「幼稚園の保育内容のながれがよく分かるので安心できる」、「気になっていることが聞きやすくなった」、「保育士の先生ともよく話ができる」、「連絡ノートでも困ったことはアドバイスを受けられるが、聞きたいことや疑問も幼稚園に行って直接尋ねることで、早く解決する」、「幼稚園に対して親近感を持つようになった」と答えている。

保護者は、園長や担任ともスムーズな関係がとれていることを認識している。保護者同士が刺激

しあえ、さらに、幼稚園に来る機会が増えることで、子どもの様子が一層良く分かり安心できるため、幼稚園との関係が良好になる。他方、家庭では、子どもと共有できる部分が増え、話題が広がるなど、二次的効果をあげている。

保護者は、読み聞かせ活動について、「とても楽しい」と感じていることは、子育てに関しても、親子関係にしても良い効果となっている。

おわりに

読み聞かせを始めた時期が秋田の調査では[39]、零歳代１歳代を合わせてみても76.1%であるが、筆者の調査では、保育園が82.3%、幼稚園が81.7%と多かった。さらに、ヒアリング調査では、零歳から読み始めたのは９人中７人、１歳代からが１人、２歳代が１人であった。胎児からも１人あり、読み聞かせる時期が早くなっていると感じた。

子どもたちは、集団での読み聞かせに目を輝かせ興味を持って聞いていた。親子関係が希薄になっているといわれる今日でも、そういう姿を目にすると、子どもたちはテレビを媒体とした一方的な語りかけよりも[40]、直接生の声で物語を聞くという、人とのふれあいを求めているのではないだろうか。とりわけ家庭での読み聞かせは、父親にも母親にも効果があることが分かった。

今回の読み聞かせに関する調査では、乳幼児期から続けて読み聞かせをした子どもが、将来どのように成長するかは明らかではない。先行研究でも筆者がみた限りでは、子どもの将来の姿に触れた研究事例は非常に少ない。だが、研究者が大学の授業のなかで「絵本の思い出」を尋ねた結果、共通していることは、「夜、寝る前にお母さんに絵本を読んでもらった時だけは、お母さんがちゃんと私を見ていてくれると感じられてとても嬉しかった」と述べている[41]。また、ほとんど覚えていない幼少の頃の思い出に、「母親や父親に読み聞かせしてもらった光景が鮮やかに甦ってくる」とも言っている[42]。

読み聞かせによる親子のコミュニケーションが増えることは、先行研究や幼稚園の調査でも明らかになっている。幼稚園のヒアリング調査では、幼稚園の保護者が読み聞かせ活動に関わったことで、ただ読み聞かせている親とは違いがあることが分かった。第一は、「本が好きだが読み聞かせることは苦手だ」と答えた親が、幼稚園での読み聞かせ活動を始めたことで、「絵本を選んだりすると子どもの反応が楽しい」と答えていることである。

第二には、幼稚園での読み聞かせ活動をきっかけに、親子で共有できる部分が増え、親子でのコミュニケーションを楽しんでいることが窺われたことである。

こうした親子のコミュニケーションをとおして、家庭内でも、「お手紙ごっこ」、「幼稚園ごっこをして絵本を読む」など、親は、ごっこ遊びのなかでも絵本の内容が使われることに気付き、「子どもの反応がすぐ解かり家庭での話題が増えてきた」ことを実感している。

ところで、読み聞かせは家庭や幼児教育の場で行われているだけではない。地域のさまざまなところで行われており、筆者も、地域の子育て支援のなかでの読み聞かせによって、言葉、リテラシー、認知的側面などが育つことを実感してきた。また、2005年の中越地震アンケート調査によると、子どもを連れての避難で、必要と思ったものとして、①乳幼児の過ごせる部屋、②年齢に合った食事と着替え、③玩具、④絵本、があげられていた。さらに、今後の支援で必要と思われるものの第３位に、絵本、次いで、玩具、があった[43]。絵本は、大きな不安やストレスから開放され、親子で絵本の世界に没頭できるのであろう。

絵本の読み聞かせに関する文献およびヒアリング調査などから、①絵本を子どもに読み聞かせることが親子の絆を深め、②本への親近感を増し、③知的な好奇心をもたらすことにつながっていくと感じている。家庭内で絵本の読み聞かせをする場合も、幼稚園での絵本の読み聞かせを行うという活動でも、きっかけはいずれであったとしても、親子のコミュニケーションを高める端緒となっている意義は大きいといえる。とりわけ、知的ビデオが、子どもの言語発達を阻害するというショッキングな研究成果も報告されているなかで[44]、絵

本の読み聞かせに関する行動は、子どもが親という「人間」への興味をもち、言葉を聴きながら思考力や集中力を高めてくれる一助に効果的ではないかと気付いた。

注

1）川端　強（2005）「ここに、こんな、かけがえのない親と子の宝があります」『絵本のある子育て』第２号、子どもの本の童話館グループ、12頁参照。
2）大道寺峰子・江田将宏（2005）『うちの子は“ゲーム脳”ですか？』３月３日毎日新聞参照。
3）「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づいて市町村は、子ども読書活動推進基本計画（都道府県子ども読書活動推進計画が策定されているときは、子ども読書活動推進計画及び都道府県子ども読書活動推進計画）を基本とするとともに、当該市町村における子ども読書活動の推進に関する施策についての計画（以下「子ども読書活動推進計画」という）を策定するよう努めなければならない。
4）古島　実（2006）「残暑お見舞い申し上げます」『にいがたの灯』Vol.48、弁護士法人新潟第一法律事務所、参照。
5）安藤哲也・金柿秀幸・田中尚人（2005）「絵本で遊ぼ！－子どもにウケるお話大作戦」小学館、６頁参照。
6）ビロウ＝尾篭とは、広辞苑によると、「きたなく、けがらわしくて、人前で失礼にあたること」としている。
7）前掲注５）参照。本書のなかで、トロルは「ぐりぐりめだまはさらのよう、つきでたはなはひかきぼうのよう」と紹介されている。つまり、北欧の昔話に登場する怪物である。
8）前掲注５）80頁参照。
9）前掲注５）56－57頁参照。
10）松居　直（2003）『絵本とは何か』日本ディタースクール出版社、71－75頁、228－232頁参照。
11）河合隼雄・松居 直・柳田邦男（2004）『絵本の力』岩波書房、181頁引用。
12）脇　明子（2005）『読む力は生きる力』岩波書店、55－59頁参照。
13）土堤内昭雄（2004）『父親が子育てに出会うとき－「育児」と「育自」の楽しみ方再発見－』筒井書房、27－29頁参照。
14）前掲注10）73頁引用。
15）椎名 誠（2003）『絵本たんけん隊』クレヨンハウス、132頁参照。
16）前掲注15）369頁参照。
17）前掲注11）9－10頁参照。
18）柏木恵子（1999）『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺－』川島書房、314頁参照。
19）小西行郎（2003）『赤ちゃんと脳科学』集英社新書、54－55頁参照。
20）横山真貴子（1997）「就寝前の絵本の読み聞かせ場面における母子の対話の内容」『読書科学』第42巻　第３号、92頁参照。
21）秋田喜代美（2004）「子どもの発達と本－市民による読書ネットワークが支える対話的読書環境－」『発達』第99号、６頁参照。
22）石崎理恵（1996）「絵本場面における母親と子どもの対話分析、フォーマットの獲得と個人差」『発達心理学研究』第７巻　第１号、10頁引用。
23）前掲注22）９頁参照。
24）菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子（2003）「父母の子育てへの感情はどのように異なるか－子ども・子育てに対する感情への規定因の検討－」『Human Developmental Research』第17号、39－52頁参照。
25）秋田喜代美（1999）『読書の発達心理学－子どもの発達と読書環境』国土社、20頁引用。
26）紅玉睦美（2006）「絵本の読み聞かせが父母に与える影響に関する研究－事例分析から－」『中国四国教育学会、教育学研究紀要』第48巻、534頁参照。
筆者によると、受容的応答とは、子どもの言動に対する好意的・積極的応答とされ、うなずきや賞賛などをいうとされている。
27）前掲注26）534頁参照。筆者によると、注視とは、子どもをみつめることをいうとされている。
28）前掲注26）534頁参照。筆者によると、表情とは、子どもの言動や絵本の内容などに対する快や笑いなどの表情や表出とされている。
29）前掲注26）532－533頁参照。
30）国文学編集部（2006）『ようこそ！絵本の世界へ《とっておきの１冊とめぐりあうために》』学燈社。84頁参照。「いないいないばあ」という誰もが知っているフレーズで「いないいないばあ」というたびに、赤ちゃんと目を見つめ合うという、人との触れ合う経験が前提となっている。また、赤ちゃんが絵本に登場する動物たちとも、１対１で向き合える構成のため、遊びの延長線上にとらえることができる。赤ちゃんが始めて出会う絵本としても、根強い人気があり「ブックスタート・パック」などにも活用されている。
31）佐々木宏子（2004）「新しい絵本と子どもの発達」『発達』第99号13頁参照。
32）前掲注31）13頁参照。
33）前掲注19）146－147頁参照。
34）前掲注20）102頁参照。

35）前掲注25）68頁参照。
36）高橋美知子（2005）「子どもへの読み聞かせにおける発達への一考察」『福祉と人間科学』第16号、125頁―146頁。
37）森上史朗・柏女霊峰（2004）『保育用語辞典－子どもと保育を見つめるキーワード』第３版、ミネルヴァ書房、353頁参照。ペープサートは、Paper Puppet Theater（紙の操り人形の劇場）の語尾がつまってできた日本語。明治期から昭和の初期にかけて縁日や祭礼で子ども向きの娯楽として演じられた立絵の技法をヒントに、永柴考堂が人形の作り方や演出等を考案した。ペープサートの人形は、基本人形（表と裏の人形画のポーズがまったく同じで向きが逆のもの）、活動人形（同一人形が違うポーズをしているもの）、景画（背景や大道具、小道具を描いたもの）、活動景画（表と裏の絵が異なる景画）の４種類。紙に書いた絵（遠目がきく平面的な絵で、人形の余白は白いまま）を竹串の両面に貼り、それらの人形を移動、反転、転画しながら展開する紙人形劇である。幼児の場合、描いた絵を切り抜き、割り箸などの棒にセロハンテープでつけただけで簡単に人形をつくれること、自分でつくった人形ですぐに遊べることが魅力の１つとなっている。かたちにとらわれず、子どもが楽しく取り組めるよう配慮したい。
38）前掲注25）23頁参照。
39）前掲注25）22－23頁参照。
40）ジム・トレリース、亀井よし子訳（2004）『読み聞かせ－この素晴らしい世界－』高文研、217－253頁参照。
41）高原典子（2003）「読み聞かせは読み愛」『保育の友２』第51巻　第２号、25頁引用。
42）前掲注41）25頁参照。
43）にいつ子育て支援センター育ちの森（2005）『中越地震アンケート調査結果』特定非営利活動法人ヒューマン・エイド22号、参照。
44）朝日新聞2007年11月１８日（日）参照。

参考文献

・秋田喜代美・無藤　隆（1995）「幼児への読み聞かせに対する母親の考えと、読書環境に関する行動の検討」『教育心理学研究』第44巻　第１号。
・秋田喜代美（1999）『読書の発達心理学―子どもの発達と読書環境』国土社。
・秋田喜代美（2003）「－今の子どもは本をよまない－を考える」『絵本について』11月号、青少年問題研究会。
・秋田喜代美（2004）「子どもの発達と本－市民による読書ネットワークが支える対話的読書環境－」『発達』第99号ミネルヴァ書房　２－７頁。
・浅川かよ子（2004）『赤ちゃんからの読み聞かせ』高文研。
・足立幸子（2002）『読み聞かせボランティアの実態調査』国立情報学研究所。
・安藤哲也・金柿秀幸・田中尚人（2005）『絵本で遊ぼ！－子どもにウケるお話大作戦』小学館。
・石崎理恵（1996）「絵本場面における母親と子どもの対話分析、フォーマットの獲得と個人差」『発達心理学研究』第７巻　第１号。１－11頁。
・井上実枝子・名倉三枝・渥美和子（2004）「幼稚園における子どもの絵本とのかかわり」『発達』第99号　ミネルヴァ書房　23－30頁参照。
・大場牧夫・大場幸夫・民　秋言（2002）「子どもと人間関係－人とのかかわりの育ち」『新保育シリーズ』萌文書林。
・長田　弘（2006）「読書からはじまる」日本放送出版協会。
・柏木恵子（1999）『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺』川島書房。
・金田一秀穂「親子で本」毎日新聞2005年３月20日。
・亀田侑子（2006）「絵本が子どもに与える影響について」。
・河合隼雄・松居　直・柳田邦男（2004）『絵本の力』岩波書店。
・川端　強（2005）「ここに、こんな、かけがえのない親と子の宝があります」『絵本のある子育て』第２号、子どもの本の童話館グループ。
・江玉睦美（2002）「絵本の読み聞かせが父母に与える影響に関する研究－事例分析から－」『中国四国教育学会、教育学研究紀要』第48巻　529－534頁。
・小西行郎（2003）『赤ちゃんと脳科学』集英社新書。
・佐々木宏子（2004）「新しい絵本と子どもの発達」『発達』第99号　ミネルヴァ書房　13－22頁。
・佐藤和江（2004）「絵本と高校生」『絵本の力－可能性』絵本フォーラム34号。
・椎名　誠（2003）「絵本たんけん隊」クレヨンハウス。
・菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子（2003）「父母の子育てへの感情はどのように異なるか－子ども・子育てに対する感情への規定因の検討－」『Human Developmental Research』第17巻　39－52頁。
・大道寺峰子・江田将宏「うちの子は“ゲーム脳”ですか？」毎日新聞2005年３月３日。
・大道寺峰子・江田将宏「親子の対話が必要－子どもとテレビゲーム」毎日新聞2005年３月４日。
・高橋美知子（2005）「子どもへの読み聞かせにおける発達への一考察」『福祉と人間科学』第16号、125－146頁。
・高原典子（2003）「読み聞かせは読み愛」『保育の友２』第51巻　第２号、24－26頁。

・高山智津子（1993）『読み聞かせで育つもの』神戸新聞総合出版センター。
・玉瀬友美（2005）「幼児保育専攻学生における絵本の読み聞かせに関するとらえ方の変化－読み聞かせ体験を通して－」『日本読書学会編集委員会編』53－60頁。
・土堤内昭雄（2004）『父親が子育てに出会う時－「育児」と「育自」の楽しみ再発見－』筒井書房。
・にいつ子育て支援センター育ちの森（2005）『中越地震アンケート集計結果－216人の声をつなげて 生かして－』特定非営利活動法人ヒューマン・エイド22。
・古屋喜美代（1996）『幼児の絵本読み場面における「語り」の発達と登場人物との関係：２歳から４歳までの継続的事例研究』『発達心理学研究』第７巻　第１号、12－19頁。
・細谷亮太他（2005）『一冊の本が人生を変える』11月臨時増刊号　文芸春秋。
・正高信男（2004）『子どもはことばをからだで覚える』中央公論社。
・松居　直（2003）『絵本とは何か』日本エディタースクール出版社。
・松川利広・横山真貴子（2005）『ことばの力が育つ保育』保育出版社。
・村中季衣（2001）「心理的ケアとしてのよみあい」『子どもの本』４月号８－11頁。
・森上史朗・柏女霊峰（2004）『保育用語辞典－子どもと保育を見つめるキーワード』第３版　ミネルヴァ書房。
・山花郁子（2000）「読み聞かせについて－私の読み聞かせ体験から－」『こどもの図書館』第47巻　第11号。
・横山真貴子・秋田喜代美（2001）「保育における読み聞かせはどのように熟達するか（２）－経験者と初心者の比較－」『人間文化論叢』第４巻　59－73頁。
・嘉数朝子・池田尚子・友利久子・識名真紀子・島袋恒男・石橋由美（2004）「家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果」『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』第６号　87－97頁。
・代田知子（2005）『読み聞かせわくわくハンドブック－家庭から学校まで－』一声社。
・脇　明子（2005）『読む力は生きる力』岩波書店。